

次世代スクールリーダーの育成

プログラム

<午前の部> 10:00-12:30 215 教室 司 会 山下克弘（大阪府教育委員会）

ケースメソッド授業 「山崎小学校の授業改革」

ケースリーダー 大脇康弘（大阪教育大学教授）
協 力 小山将史・深川八郎
(注) 定員 30 名、事前課題あり、iii - iv 頁を参照

<午後の部> 13:30-17:30 ミレニアムホール 総合司会 中西正明（大阪市教育委員会）

開 会 あ い さ つ 長尾彰夫（大阪教育大学学長）
川村幸治（大阪府教育委員会教育監） 沼守誠也（大阪市教育委員会教育次長）

基 調 講 演 次世代スクールリーダーの育成 元兼正浩（九州大学大学院准教授）

ピアノとチェロの共演 「今、命を見つめる音の世界」 ラフマニノフ：ヴォカリーゼ他
田中紘二（大阪教育大学名誉教授） 大木愛一（大阪教育大学教授）

司会：林 龍平（大阪教育大学） 田中 肇（大阪府教育委員会）

シ ン ポ ジ ウ ム 次世代スクールリーダーの条件

- ・スクールリーダーの専門職基準
- ・新しいスクールリーダーの役割
- ・スクールリーダーの育成
- ・スクールリーダーの「学びの場」

牛渡 淳（仙台白百合女子大学人間学部部長）
宮田逸子（大阪市立花乃井中学校長）
浅田明子（大阪府立刀根山支援学校長）
大仲政憲（大阪教育大学教授）

閉 会 あ い さ つ 水野和幸（大阪市教育委員会）

大会概要

日時

2011(平成23)年11月19日(土) 10:00～17:30 (開場は9:30)

場所

大阪教育大学天王寺キャンパス
ミレニアムホール、215 教室他

対象者

大阪府内の学校に勤務する教職員、行政職員など

定員

60 名

参加費

無料

アクセス

大阪教育大学天王寺キャンパス
〒543-0054 大阪市天王寺区南河堀町 4-88 TEL (06) 6775-6611
JR 天王寺駅、地下鉄天王寺駅、近鉄大阪阿部野橋駅下車、約 650 m
JR 寺田町駅下車、約 400 m

申込方法

(1) 次の内容をご記入の上、E-mail にて個別にお申し込み下さい。

- ① 名前、勤務校、職位、電話、E-mail
- ② 午前の部「ケースメソッド授業」(定員 30 名) への参加希望の「有・無」
* 午前の部からの申込者を優先的に受け付けます。
- ③ 自己紹介文(200 字程度)

(2) 申込先：下記のメールアドレスへお送り下さい。

件名は「SLF11 参加申込」
大阪教育大学総務課総務係
E-mail: soumuka@bur.osaka-kyoiku.ac.jp

(3) 申込締切日：2011(平成23)年11月10日(木) 必着

(4) 参加の可否

参加の可否は、申込受付後 10 日以内に E-mail にてご連絡します。定員に達し次第、締め切らせていただきます。なお、ケースメソッド授業参加者には、事前にケース教材をメールで送付します。

スクールリーダー・フォーラム事務局

- 大阪教育大学スクールリーダー・プロジェクト (SLP) 大脇康弘 林龍平 大仲政憲 小山将史
- 大阪府教育委員会 教育振興室高等学校課 学校経営支援グループ
- 大阪市教育委員会 総務部総務課 企画グループ

■ 次世代スクールリーダーの育成

大学と教育委員会は「連携協力の協定書」に基づいて、学校を支援しスクールリーダーの「学びの場」を創り出すために、スクールリーダー・フォーラム (SLF) を 10 年にわたって開催してきました。

第 11 回フォーラムは、次世代スクールリーダーの役割を明らかにして、その育成について考えます。日本やアメリカでは「校長の専門職基準」が作成され、校長は「教育活動を組織するリーダー」としてその資格要件や研修内容が定められています。

基調講演者とシンポジストには第一線で活躍する先生方をお招きし、理論・政策・実践の各視点から積極的なご提言をいただきます。スクールリーダーが不足がちな現在、スクールリーダー候補者をプールし学校マネジメント能力を育成していくことについて検討していきます。

また、第 10 回フォーラムで取り組んだ「ケースメソッド授業」を体験するワークショップも併せて行います。はじめての方でも、事前に配布される「ケース教材」を読んで自分ならばどのように行動するかを考えて討議に参加すれば、これまでと異なる学習に触れることができます。この機会にぜひ挑戦してください。

なお、このフォーラムでいうスクールリーダーは「学校づくりの中核を担う教職員」で、校長、教頭、首席・指導教諭、主要な主任、事務長などを含みます。

スクールリーダー教育に関心をお持ちの先生は、ぜひご参加下さい。

(参考) 日本教育経営学会「校長の専門職基準 (2009 年版)」日本教育経営学会 H P 参照

■ フォーラム講演者・報告者 Profile

元兼 正浩 (Motokane, Masahiro)

九州大学大学院人間環境学研究院
教育学部准教授

教育行政学・学校経営学専攻、九州大学教育学部助手、福岡教育大学専任講師・助教授を経て現職。校長人事を中心テーマとし、学校マネジメント支援から自治体教育政策にまで幅広く参画している。日本教育経営学会理事、日本教育制度学会理事。著書に『次世代スクールリーダーの条件』ぎょうせい、『21 世紀の学校改善—ストラテジーの再構築—第一法規(共著)。

牛渡 淳 (Ushiwata, Jun)

仙台北百合女子大学人間学部長・教授、
東京学芸大学客員教授

専門は教育行政・経営学、教師教育研究。アメリカ・カリフォルニア大学バークレー校客員研究員等を経て現職。アメリカの校長養成・研修・専門職基準、教員免許・養成・研修等の研究を行っている。日本教育経営学会理事、日本教師教育学会理事。著書として『現代米国教員研修改革の研究』風間書房、『初めて学ぶ教育の制度・行政・経営論』金港堂(編著)。

宮田 逸子 (Miyata, Itsuko)

大阪市立花乃井中学校校長

平成 15 年大阪市立校長会会長。平成 17 年 4 月より大阪市立花乃井中学校校長として着任。現在に至る。平成 20 年に『「授業力向上」実践レポート』に「進取の気性に富む学校経営」を執筆。校長のリーダーシップと改革への熱い思いを綴り、注目を集めた。学校現場では、教職員一人ひとりが弛まぬ努力と研鑽を積み、研修の成果をしっかりと子ども達に還元、子どもを中核にすえた学校づくりと教育実践に励んでいる。

浅田 明子 (Asada, Akiko)

大阪府立刀根山支援学校校長

大阪府立高等学校教諭(国語)となり、2 校 22 年間勤務。その後、教頭として 2 校に勤務し、大阪府教育センター首席指導主事・学校経営研究室長となる。学校経営研究室では、府立学校および府内小中学校の校長・准校長・教頭・首席等の研修や、教師をめざす大学生のための講座「大阪教志セミナー」を担当。今年度より大阪府立刀根山支援学校校長。

大仲 政憲 (Ohnaka, Masanori)

大阪教育大学教育学部教授

堺市立浜寺中学校、大阪教育大学附属天王寺中学校・同附属高等学校天王寺校舎で理科を担当。その後、大阪教育大学附属天王寺中学校副校長、堺市教育委員会事務局総務部教育政策課主幹、堺市立福田小学校長を経て現職。理科教育学を担当し、理科指導法の改善に関する実証的研究を行い、子どもの素朴概念を踏まえた指導や命の大切さに関する指導などの論文を発表している。日本理科教育学会、日本環境教育学会に所属。

大脇 康弘 (Owaki, Yasuhiro)

大阪教育大学教育学部教授

教育経営学・教師教育学専攻。学校マネジメントおよびスクールリーダー教育について理論・政策・実践から総合的に研究する。スクールリーダー・プロジェクト (SLP) を組織し、大学と教育委員会の連携によって学校を支援しスクールリーダーを育成する事業を展開する。日本教育経営学会理事、日本教育制度学会理事。編著書に『学校をエンパワメントする評価』ぎょうせい、『学校評価を共に創る』学事出版。

■ ピアノとチェロの共演

< 今、命を見つめる音の世界 > 田中紘二 (大阪教育大学名誉教授) 大木愛一 (大阪教育大学教授)

・モーツァルト：ロンド 二長調 ・バッハ＝グノー：アヴェ・マリア ・ラフマニノフ：ヴォカリーゼ

・サンサーンス：白鳥 (曲目は予告なく変更されることがあります。)

ケースメソッド学習入門

―スクールリーダー・セミナーの取組から―

お願い

ケースメソッド授業に参加する方は、この「ケースメソッド学習入門」をよく読んだ上で、事前配付される「ケース教材」について学習し、事前課題レポートを作成してください。形式は、A 4 判横書 1 枚(簡条書きでよい)で、当日 8 部持参して下さい。グループ討議はこのレポートを参照しながら行います。

① ケースメソッドの学習過程

ケースメソッドは、実際の出来事を記述したケース教材をもとに、自らが当事者ならばどのように意思決定するかをまとめた上で、集団で討議を重ねる教育方法である。「ケース討議法」と訳せる。ケースメソッドは定式化された理論と技法に基づいて、①ケースリーダー(ディスカッション・リーダー)②ケース教材③学習者集団④学習の場・条件の四要素が織りなす複雑な学習・教授過程である。

ケースメソッド学習のプロセスは、個人学習、グループ討議、クラス討議(individual reading, group discussion, class discussion)の三段階を経るが、スクールリーダー・セミナー(SLS, 2010)では第四の段階として、個人レポートの作成を組み込んでいる。これについて整理すると次のようになる。

①<個人学習>

参加者は、前もって配付されたケースを読み込み、「事前課題レポート」を作成する。

- ・当事者としてケースの経営問題を把握し、どのような意思決定をするかを考える。
- ・ケースに付された「設問」を意識して、ケースを読む。
- ・自分の考えをメモして、レポートにまとめる。

②<グループ討議>

グループ(6名程度)に分かれて、お互いの分析を検討する。

- ・個人学習の成果を持ち寄り、グループで議論する。
- ・ケースを多様な角度から分析していく場となる。

③<クラス討議>

参加者全員が集合して、講師のリードによってクラス討議を行う。

- ・参加者は自分の考えや意見を述べる。
- ・参加者は他者の考えや意見に耳を傾ける。
- ・講師はディスカッション・リーダーとなって参加者の自主的討議を誘導する。

④<個人レポート作成>

参加者は各自の学習のまとめと振り返りを行う。

- ・学習体験を文章化することによって、まとめと振り返りをしっかり行う。

時間配分について、慶應義塾大学ビジネススクール(KBS)では、個人学習、グループ討議、クラス討議をそれぞれ 180 分、90 分、90 分として、1 ケースに 6 時間かける。スクールリーダー・セミナーでは、120 分、40 ～ 60 分、60 ～ 90 分を目安に内容を構成した。

セミナーでは個人レポートの作成を重視し、毎回事前課題レポートを A 4 判 1 枚にまとめ、セミナー当日 8 部持参し、これを参照しながらグループ討議を行う。そこでの討議内容について、ホワイトボードの代用となる「ライティングシート」に板書することが効果的である。そして、セミナー終了後に自己の学びを振り返るレポートを A 4 判 1 枚にまとめてもらい、第 10 回スクールリーダー・フォーラム報告書『スクールリーダーの実践力育成』(2011.3)に所収した。これによって参加者一人ひとりの学びの姿と特徴を記録し、セミナーの成果と課題を読み取ることができる。



② スクールリーダー・セミナー受講者の学び

スクールリーダー・セミナーとして開催された「ケースメソッド教育入門」の反響は大きく、締め切り日までに定員 24 名を超える 36 名の受講申込があった。主催者はセミナーの運営規模ぎりぎりであったが、全員を受け入れることとした。セミナー参加者の内訳は、職位別では校長 6、教頭 10、首席・指導教諭 8、各種主任・教諭 6、大

学 1、指導主事 5 であり、校種別では小学校 11、中学校 4、高校 12、(特別)支援学校 3、大学 1、教育委員会 5 であった。年齢別では 40 代後半から 50 代が大半であったが、30 代も少数参加していた。この多種多様な参加者を「まぜる」方向で毎回異なるグループを編成した。

このセミナーでスクールリーダーがどのような学びを重ねていったのか、参加者自身のレポートから一部引用する形で紹介したい。

これまでの研修は、新しい知識や正解を学ぶことがほとんどであった。会議においてもより良い解決策が求められていた。このケースメソッドは、今までの研修とは明らかな違いがあった。当初は、ケースをケーススタディのように捉えてしまったため戸惑いを感じることもあった。しかし、グループ討議やクラス討議を体験し、講師の方の講義を受けてケーススタディとの大きな違いを体感するとともに理解することができ、多くのことを学ぶことができた。このセミナーを受講することで自分の殻を破り、思考の広がり深まりを自覚することができたのは、私にとって大きな収穫である。

(樋口信幸)

ケース教材は、生の現実を相手に、さまざまな場面を想定しながら思考を収斂させていく。その際、相手の意見を最大限尊重しながら、常に建設的、前向きに対応することを了解事項として設定している。これは自分の固い殻を一旦壊し、思考の回路を柔軟にすることと、手助けしてくれる多くの仲間の意見を建設的に引き出す効果を副次的に与えるものである。

(乗田政長)

ケースメソッド教育を体験して、3 点の学び楽しさを実感した。1 つ目は、ケースに向かい合う楽しさ。2 つ目は、グループ討議の楽しさ。3 つ目は、クラス討議の楽しさである。(中略) クラス討議において「知らないことを知る。」「自分の視野が開かれる。」という楽しさを感じた。校種・職種・勤務地の違う人たちから、様々な考え方が聞けた。勤務地が違えば、学校教育の推進方法がずいぶん変わってくる。今までの自分の中では考えもしない方法や苦労に驚き、視野も広げられた。グループ討議では終わらずに、全体討議に広げることの意義を感じた。また、様々な意見を聞きながら、学習を振り返ることで、自分の考えを再び整理し、まとめることができた。

(大橋雅代)

竹内伸一慶應義塾大学特任准教授は、ケースメソッド教育で養う能力を、①自律的に職務を遂行する力②人とつながる力③人を束ね、方向づける力の三つに要約している。スクールリーダー・セミナー参加者はケースメソッド学習の四段階で「読む、考える、書く、発表する、聞く、討議する、まとめ板書する、文書作成する」など多様に活動すると同時に、参加者同士、参加者と講師の相互作用の中で学ぶ。この複雑な学習プロセスを通して、スクールリーダーの意思決定能力だけでなく人間力を培うことになると考えている。

(文責 大脇康弘)

◇主要参考文献◇

- ・石田英夫・大久保隆弘・星野裕志編『ケース・メソッド入門』慶應義塾大学出版会、2007。
- ・高木晴夫・竹内伸一『日本型ケースメソッド教育』ダイヤモンド社、2006。
- ・竹内伸一『ケースメソッド教授法入門』慶應義塾大学出版会、2010。
- ・百海正一『ケースメソッドによる学習』学文社、2009。
- ・一橋ビジネスレビュー編集部『ビジネス・ケースブック 2』東洋経済新報社、2003。
- ・バーンズ・クリステンセン・ハンセン編、高木晴夫訳『ケース・メソッド教授法』ダイヤモンド社、2010。
- ・東北大学経営学グループ『ケースに学ぶ経営学』有斐閣、2008。
- ・安藤輝次『学校ケースメソッドで参加・体験型の教員研修』図書文化社、2006。
- ・岡田加奈子・竹鼻ゆかり編『教師のためのケースメソッド教育』少年写真新聞社、2011。
- ・大脇康弘編『学校改革を担うスクールリーダーの育成—ケースメソッドで学ぶ』慶應義塾大学出版会、近刊

School Leaders Forum SLF11

スクールリーダー・フォーラムの挑戦

— 大学・学校・教育委員会のコラボレーション —

フォーラムの理念

- ① スクールリーダーの「学びの場」を創る
- ② 学校づくりを専門的立場から支援する
- ③ 学校づくりの理論・政策・実践を総合的に検討する
- ④ 実践者・政策担当者・研究者が現実に即して研究交流する

フォーラムの概要

- ① 9年間で10回(今回で11回)のフォーラム開催
- ② 講演・報告者121名、参加者978名
- ③ 報告書10冊、総頁数1,262頁、10,000部配布
- ④ 大学・学校・教育委員会のコラボレーション

■お礼■ スクールリーダー・フォーラムの企画運営、実施にあたって、大阪府教育委員会、大阪市教育委員会、大阪府下市町村教育委員会、学校教職員、大学教職員、大阪教育大学事務局に所属する多くの方々から多大なご協力とご支援をいただきました。ここに記して深甚の感謝を申し上げます。

スクールリーダー・フォーラム事務局

大阪教育大学 天王寺キャンパス E-mail : slp0303@cc.osaka-kyoiku.ac.jp

スクールリーダー・フォーラムの理念と歩み

― 大学・学校・教育委員会のコラボレーション ―

スクールリーダー・フォーラム（SLF）は、大阪教育大学スクールリーダー・プロジェクト（SLP）が大阪府教育委員会および大阪市教育委員会（2009年度以降参画）との合同プロジェクトとして取り組んできた事業である。このフォーラムの目的はスクールサポーター（学校支援と学校づくりを担うスクールリーダーの育成にある。フォーラムでは、スクールリーダーが学校づくりの課題に即して自校の実践を持ち寄り研究協議し、学校づくりの理論・政策・実践を総合的に検討することを重視してきた。つまり、スクールリーダーの「学びの場」(フォーラム)を創り出すことをめざしたのである。

ここではフォーラムの理念・内容・形態・組織を類型的に整理し、その特徴と成果について検討してみたい。研究対象は第1回から第10回までのフォーラムである。まず、フォーラムを立ち上げる契機となったスクールリーダー・プロジェクトについて触れておこう。

① スクールリーダー・プロジェクトの取り組み

大阪教育大学は大阪府教育委員会および大阪市教育委員会と「連携協力の協定書」を2002年に締結した。これに基づき、スクールリーダー・プロジェクト（SLP）は学校を支援しスクールリーダーの「学びの場」を創ることを目的とする学内横断組織（代表…長尾彰夫現学長）として正式に発足した。SLPは2001年に設けた3人からなるス

クールリーダー研究会を前身とするが、今日まで教育委員会および学校と連携協力しながら、学校とスクールリーダーをサポートする多種多様な事業に取り組んできた。そして、この事業で得た成果や知見は夜間大学院実践学校教育専攻の教師教育、特にスクールリーダー教育に積極的に取り入れられ、スクールリーダー・コース（SLC）創設に寄与したのである（2007.4）。2001年から2011年現在までにSLPが主催・共催・参画・支援した事業を整理すると、次のようになる（括弧内は年度）。

- ① スクールリーダー・フォーラム（SLF）…大阪府教育委員会・大阪市教育委員会（2009年度以降参画）との合同プロジェクト（2002～現在）
- ② 「学校評価実証校」支援プロジェクト（SRP）…大阪府教育委員会との合同プロジェクト（2004～2005）
- ③ 「府立高等学校経営革新プロジェクト事業」（SIP）…大阪府教育委員会との合同プロジェクト（2005～2008）
- ④ 大学と連携した学校づくり（PDS）…夜間学部が小学校で試行（2004～2006）
- ⑤ スクールリーダー対象のセミナー（SLS）…スクールリーダー・セミナー・夏期集中講座（2004）、スクールリーダーシップ講座（大阪）「学校づくりの理念と技術」、広域大学間教員養成・研修コンソーシアム…筑波大学・大阪教育大学・千葉大学・東京学芸大学（2006）、スクールリーダー・セミナー2010…ケースメソッド

ド教育入門、スクールリーダー・セミナー2011

⑥夜間大学院・実践学校教育専攻の大学院改革…三コース制導入・スクールリーダー・コース(SLC)の創設、授業開発

⑦研究報告書の刊行・配布…①～⑥の報告書刊行、雑誌連載、単行本『学校評価を共に創る―学校・教委・大学のコラボレーション』出版

これら7種の事業はその目的・内容・方法・形態・組織運営において多様であり、必要性和可能性を見定めて企画実施、改革実践されてきた。フォーラムと他の事業の関係を実践から跡づけてみると、①フォーラム(SLF)は10年間にわたる持続的な基幹事業として展開されてきた。これは他の活動の基盤となり、ここから②学校評価(SRP)が創発され、③経営革新(SIP)の学校支援事業が合同プロジェクトとして取り組まれることとなった。次に、スクールリーダー教育の取り組みとして、⑤セミナー(SLS)(2004、2006、2010、2011)を開催し、⑥スクールリーダー・コース(SLC)が立ち上げられた。ここでは大学研究者の理論や知見だけでなく、先合同プロジェクトの成果と知見を積極的に取り入れ、深化発展を図ることを大切に

にしてきた。他方で、その逆の回路も意識して、相互につなげようと心がけてきた。

今回研究対象とする①フォーラム(SLF)は、先の②～⑦の事業と密接な関連の中で実施され、そこにおけるフォーラム、インフォーマルな人のつながりに支えられているのである。

なお、このフォーラムでいうスクールリーダーとは「学校づくりの中核を担う教職員」で校長・教頭、首席(主幹教諭)・指導教諭、主要な主任、事務長をいう。いわゆる組織リーダーと教育リーダーを含む総称として使っている。フォーラムの参加対象者には、この他に指導主事、スクールリーダー候補者、研究者も受け入れている。

② スクールリーダー・フォーラムの理念と特徴

スクールリーダー・フォーラム(SLF)の理念は、その立ち上げ以来不変である。第1回フォーラム報告書の冒頭には「スクールリーダー・フォーラムの開催に当たって(2003.3)で次のように明記している。

1. 大学と教育委員会が提携して、学校づくりを専門的立場から支援する。

2. 学校づくりの在り方について、実践者、研究者、政策担当者が一堂に会して研究交流し、より豊かな学校教育の在り方を考えていく。

3. 学校づくりの実践例を研究協議の場に提示して、多様な視点からその成果と課題を見定めるとともに、他校への応用可能性を検討する。

4. この研究協議を通して、学校づくりに関わる関係者の視野と力量を高めることを目指す。

この基本的考え方は、毎年度企画運営の組織で確認し、事業内容を組み立てる基盤となり、また、報告書に記載することにより関係者や参加者の理解を得るよう努めてきた。

フォーラムは2002年度第1回がスタートし、毎年度1回(2003年度は2回)のペースで継続的に開催されてきた。2009年度の第9回フォーラムからは大阪市教育委員会が新たに参画し、三組織の合同プロジェクトに発展してきた。第1回～第10回の概要は、「スクールリーダー・フォーラムの歩み」「スクールリーダー・プロジェクト(SLP)研究報告書一覧」(別掲)の通りであるが、それを一覧表にしたものが表1である。

表1 スクールリーダー・フォーラムの概要

単位は人、報告書のみページ

回	フォーラムのテーマ	基調講演者	シンポ報告者	分科会	参加者	報告書	開催年月日
1	学校教育自己診断を実践する	木岡一明	3	7	112	105	2003. 3. 1
2	学校を開く・学校を診断する	成山治彦	3	14	156	140	2003.11.29
3	スクールリーダー養成の必要性和可能性	小島弘道	4	—	101	160	2004. 3.27
4	授業評価の理論・政策・実践	森田英嗣 大木愛一	—	6	21	132	2005. 2.19
5	リーダー層教員の力量形成	木原俊行	4	—	121	116	2005.11.26
6	スクールリーダーの学習拠点づくり	大野裕己 中島智子	2	5	31	160	2006.11.26
7	学校課題への挑戦	福永光伸	4	21	192	115	2008. 1.30
8	学校の自己革新と支援体制	大脇康弘	3	15	27	96	2009. 2.28
9	豊かな学校評価を求めて	天笠 茂	5	8	135	108	2009.11.29
10	スクールリーダーの実践力育成	竹内伸一 佐野享子	4	—	82	130	2010.11.27
11	次世代スクールリーダーの育成	元兼正浩	4	—	(60)	(100)	2011.11.19



このフォーラムを形態、テーマ、規模、事務局体制の点から類型化してみよう。形態別に見ると、基本形態は基調講演・シンポジウムと分科会を組み合わせる「公開協議型」である。参加者数1000人を標準としている。基本形態の変型として分科会を設けないこともある。「公開協議型」としては第1回、第2回、第7回、第9回、そして変型として第3回、第5回が該当する。これと対照的なのが、参加者のほとんどが順次報告し全員で協議する「参加者報告協議型」である。参加者がじっくり討議し「知識創造」するのにふさわしい形態であり、参加者数は30人を目安としている。これには第4回、第6回、第8回が該当する。また、第10回では4日間のセミナーを開催し、その取り組みを生かしてフォーラムを開

催したが、これを「セミナー展開型」と名付けたい。なお、第7回、第8回は大阪府教育委員会の主催事業に組織間連携して3～4年間にわたる活動を集約するフォーラム開催となったので、「セミナー展開型」に含めることもできる。

分科会を設置したのは、第1回、第2回、第4回、第8回、第9回であるが、ポスターセッション方式を採用した第7回もこれに準じるものである。

フォーラムは1日または半日の大会で、通常土曜日または日曜日に開催される。その準備のために企画運営会議や意思疎通のための連絡調整はほぼ年間を通して行われる。事例報告校に対しては大学教員や指導主事が学校訪問をし、必要に応じて連絡調整、意見交換、助言指導が複数回行われる。また、フォーラムの報告者は事前に完成論稿を提出し、大会当日は参加者に配付された「フォーラム報告書」に基づいて研究協議が行われることを原則とした。こうして単発のイベントに止まるのではなく、フォーラムを通して関係者の認識が深まるよう「しかけ」を組み込んだのである。

テーマ別にみると、学校づくりに関係するものは第1回、第2回、第4回、第

7回、第8回、第9回であり、スクールリーダー育成に関係するものは第3回、第5回、第10回である。第6回はフォーラムを含むスクールリーダー・プロジェクト（SLP）の活動を振り返り考察することをテーマとした。いずれも大阪府および大阪市の教育施策の方針・内容・展開を踏まえながら、理論・政策・実践を関係づけて検討すること、大阪府・大阪市を基盤にしながらか他府県の先進的な取り組みや世界的な動向を見定めながら研究協議することを重視してきた。プログラムの企画構成では、教育政策や学校実践を相対化し広げたり深めたりすることにつながるよう創意工夫してきた。

フォーラムの規模をみると、参加者は原則として定員1000人を一つの目安としてきた。これは研究協議の密度を保障することと、天王寺キャンパスの会場の収容定員からの判断であった。1000（2000人規模は「公開協議型」の第1回、第2回、第3回、第5回、第7回、第9回「セミナー展開型」の第10回が該当し、30人前後は「参加者報告協議型」の第4回、第6回、第8回が該当する。

三組織の担当部局をみると、大阪教育大学は一貫してスクールリーダー・プロ

ジェクト（SLP）であるが、各教育委員会の事務局担当者は交替してきた。大阪府教育委員会は教育振興室の学事課、教務課、部局再編後の高等学校教務学校経営支援グループ、同教務グループなどで、テーマに応じて主担部局は移ってきた。大阪府教育委員会は総務部の企画担当、総務課企画グループである。教育委員会職員の人事異動のため担当者の顔ぶれも毎回変化するので、フォーラムの理念と方法を確認しながら、毎回の企画を構成していくことが必要不可欠である。

以上のように、フォーラムはテーマ・内容・方法・形態別に類型化することはできるが、その内実は極めて多様である。企画運営者からみれば、理念は一貫して変わらないが、各回ごとに教育施策の展開、学校現場の実施状況、大学と教育委員会の組織体制などを総合的に判断してテーマ・内容・方法・形態を柔軟に固めていき、軌跡となったというのが実情である。

③ フォーラム分析の 視点と方法

さて、フォーラムの特徴と意味を省察するために、ここでは三者の連携、理論と実践の関係、事業の独自性という点から、次の三つの視点を設定したい。

a. 三者の「つながる場」の形成
① 教育研究者・学校教職員・政策担当者との連携

b. 「創発の場」の形成
② 大学・学校・教育委員会の連携

① 学校づくりおよびスクールリーダー育成の理論・政策・実践の関係づけ

② 理論知と実践知の交流・対話・統一

c. フォーラム理念の具体化

① 独自性・持続性・挑戦性

② 学校支援とスクールリーダー育成への貢献

また、比較事例分析を行うために、次のような手続きで事例を選定する。10回にわたるフォーラムは先に述べたようにテーマ・内容・方法・形態からして次の3グループに分けられる。各グループご

とに代表的事例を1つ選んで、3つの事例を比較することにする。

A. 公開協議型 一般型(その変型を含む)

① 学校づくり関係 第1回、第2回、第7回、第9回、② スクールリーダー育成関係 第3回、第5回
↓ 選定事例 第1回

B. 参加者報告協議型

① 学校づくり関係 第4回、第8回、② SLP関係 第6回、
↓ 選定事例 第8回

C. セミナー展開型

① スクールリーダー育成関係 第10回
② 学校づくり関係(第7回、第8回)
↓ 選定事例 第10回

毎回のフォーラムに関しては次のような内容・形式で関係資料が作成・公表・保存されており、参照可能である。①「フォーラム報告書」、②雑誌論文、③学会発表資料、④当事者と外部者による分析評価(第6回報告、⑤外部者による論稿、⑥その他、である。

なお、本研究には次のような制約がある。著者はこの事業を中核的に担ってきた当事者であり、事業の内実とその基盤・背景を熟知しているが、実践者・当事者としての制約を免れない。また、合同プ

ロジェクトに参画してきた多くの関係者、特に連携先である教育委員会職員とは企画会議やフォーラム終了後に意見交換しているが、実証的に資料整理しているわけではない。今回の報告は、フォーラム事業について先に示した公開資料を中心に考察するものである。

④ スクールリーダー・ フォーラムの事例分析

三つの選定事例、第1回、第8回、第10回はフォーラムの理念を具体化しようとしたものであるが、テーマ・内容・方法・形態は全く異なっている。各回のプログラムは表2の通りである。その概要を整理しておこう。



■ 表2 スクールリーダー・フォーラムのプログラム (第1回、第8回、第10回)

第1回	スクールリーダー・フォーラム SLF01	第8回	スクールリーダー・フォーラム SLF08	第10回	スクールリーダー・フォーラム SLF10
「学校教育自己診断を実践する —学校を開く試み—」		「学校の自己革新と支援体制 —学校革新プロジェクト 2008—」		「スクールリーダーの実践力育成 —ケースメソッド学習入門—」	
大阪府教育委員会・ 大阪教育大学合同プロジェクト		大阪府教育委員会・ 大阪教育大学合同プロジェクト		大阪教育大学・大阪府教育委員会・ 大阪市教育委員会合同プロジェクト	
(1) 日時：2003 (平成 15) 年 3 月 1 日 (土) 10:00 ~ 17:00		(1) 日時：2009 (平成 21) 年 2 月 28 日 (土) 13:00 ~ 18:00		(1) 日時：2010 (平成 22) 年 11 月 27 日 (土) 10:00 ~ 17:30	
(2) 場所：大阪教育大学天王寺キャンパス		(2) 場所：大阪教育大学天王寺キャンパス		(2) 場所：大阪教育大学天王寺キャンパス	
(3) プログラム 10:00-12:00 研究協議会 (分科会) <小学校分科会> 司会：中島智子 (大阪府教育委員会) 大野裕己 (大阪教育大学) 研究報告 1 箕面市立西小学校 (田中直樹教諭) 研究報告 2 堺市立土師小学校 (鯉坂農子校長) <中学校分科会> 司会：橋本幸一 (大阪府教育センター) 金子 勉 (大阪教育大学) 研究報告 1 豊中市立第一中学校 (大友庸好校長) 研究報告 2 高槻市立川西中学校 (浦岸英雄校長) <高校分科会> 司会：八尾 隆 (大阪府教育委員会) 大脇康弘 (大阪教育大学) 研究報告 1 大阪府立鳳高等学校 (清 広志教頭) 研究報告 2 大阪府立吹田東高等学校 (中村光男教諭・浅川又一教諭)		(3) プログラム 総合司会：久郷正征 (大阪府教育委員会) 開会あいさつ 木立英行 (大阪教育大学理事) 福永光伸 (大阪府教育委員会) 基調報告： 学校革新の構造とプロセス 大脇康弘 (大阪教育大学) ■事例校からの報告 (各校 30、研究協議 15) (単位は分) セッション司会：黒田浩継、加川眞一、 小林幸哉、伊藤倫隆、 唐澤広幸 □吹田東高校 データに基づく学校革新の展開 唐澤広幸・小野満由美、水本徳明 (筑波大学) □久米田高校 ミドルリーダーを軸とする学校革新 黒田浩継・吉川測雄、大脇康弘 (大阪教育大学) □刀根山高校 学校革新に取り組んだ普通科高校 加川眞一・梅景一雄、芹沢利弘 (筑波大学大学院) □布施高校 全員参加をめざす学校革新 小林幸哉・徳幸道、大野裕己 (兵庫教育大学) □市岡高校 学校の潜在力を生かす取り組み 伊藤倫隆・奥田育秀、服部憲児 (大阪大学) ◇総括講演 中井浩一 (鶏鳴学園) 水本徳明 (筑波大学) 福永光伸 (大阪府教育委員会) 総括司会：大脇康弘 閉会の辞		(3) プログラム 10:00-12:30 グループワーク 司会：寶田康彦 (大阪府教育委員会) 第 1 部： ケースメソッド教育の意義と課題—自己の学びを振り返る— コーディネーター：臼井智美 (大阪教育大学) 13:30-17:30 第 2 部： ケースメソッド教育によるスクールリーダーの学び (講演&パネルディスカッション) 総合司会：野口幸一 (大阪府教育委員会) 開会のあいさつ 長尾彰夫 (大阪教育大学学長) 田中保和 (大阪府教育委員会教育監) 沼守誠也 (大阪市教育委員会教育次長) 講演 1： ケースメソッド授業を拓く 竹内伸一 (慶應義塾大学大学院経営管理研究科特別研究講師) ビデオ視聴： ケースメソッド授業「KBS：ベンチャー電子工業」 パネルディスカッション： スクールリーダーの学びを拓く コーディネーター： 赤石美保子 (大阪市教育委員会) パネラー： 下川清一 (大阪府立野崎高等学校校長) 大矢根克典 (堺市立月洲中学校首席) 井出一志 (大阪市立都島小学校首席) 大脇康弘 (大阪教育大学教授) 講演 2： ケースメソッド学習を拓く 佐野享子 (筑波大学大学院ビジネス科学研究科准教授) 閉会のあいさつ 服部敬一 (大阪市教育委員会)	

(1) 公開協議型の創発 第1回フォーラム

第1回フォーラムは「学校教育自己診断を実践する―学校を開く試み―」をテーマに掲げて行った。いわゆる学校評価を理論・政策・実践の三側面から総合的に検討しようとしたもので、当時としては先進的な取り組みであった。大阪府では学校教育自己診断が1998年度から試行されて本格実施される時期に、新しい学校づくりのキーになることを見通しての判断であった。

フォーラムの形態は午前小・中・高等学校別の分科会、午後に基調講演・パネルディスカッションの内容で開催された。100名を超える参加者が集い、各分科会・シンポジウムで積極的に研究討議を行った。

講演者やシンポジスト、分科会報告者などには、事前に論文作成を依頼して「フォーラム報告書」として編集し、当日配布することとした。これによって報告内容に厚みができ、研究協議が促進された。その後、この報告書を再編集して、『学校評価を共に創る―学校・教委・大学のコラボレーション―』（学事出版）を刊行した。第1回よりフォーラム独自のあり

方を志向し、学校・教委・大学のコラボレーションによってはじめて獲得できる内容・質を持つことができたと考える。事業経費は創設された大阪教育大学「学長裁量経費」に申請し、資金確保できた。それ以後今日まで毎年度継続的に資金確保していくことになる。

(2) 公開協議型から 参加者報告協議型への展開 第8回フォーラム

第8回スクールリーダー・フォーラム（2008）では「学校の自己革新と支援体制」をテーマに掲げた。これは「府立高等学校経営革新プロジェクト事業」（以下、経営革新プロジェクトと略）の3年間にわたる成果を、4年目に振り返り、さらなる実践的展開と理論的整理を行うことを主眼としている。

「経営革新プロジェクト」（2005～2007）は、大阪府教育委員会が主催する規模の大きい事業で、府立学校21校が経営革新推進校として参加し、3年間にわたる経営実践に取り組んできた。大阪教育大学スクールリーダー・プロジェクト（大脇・大野・服部・木原）は、こ

の事業に参画し、学校を支援する取り組みに深く関わってきた。毎年度、推進協議会が年3回開かれ、21校の教職員と担当指導主事、大学教員の50名近い人々が、実践報告と研究協議を重ね、学びを重ねてきた。さらに、大学教員と担当指導主事が連携して、アクションリサーチ校4校、比較対照校4校を訪問調査し、学校の観察調査と意見交換を行った。

そして、第7回スクールリーダー・フォーラム（2007）は「学校課題への挑戦―経営革新に取り組んだ3年間―」と題して、21校すべてのポスターセッションとパネルディスカッションを実施した。これには、高等学校の校長・教頭、首席、教諭、教育委員会職員、大学教員など191名が参加し、経営革新という堅いテーマをめぐって、幅広い交流がなされた。

第8回は、この成果を総括し、さらにグレードアップを図るべく、次のような枠組を設定した。第一に、事例校を5校に絞り、ミドルリーダーによる学校革新の歩みの整理、校長による学校革新のマネジメントの報告、研究者による学校革新の特徴と課題の分析を交錯させることを通して、立体的な把握を試みた。第二

に、学校革新を支援する教育委員会および大学の在り方を実践的に整理し、理論的な問題提起を試みることにした。第三に、学校革新や高校教育の研究に造詣が深い人々を招き、私たちの取り組みを位置づけ評価してもらうこととした。水本徳明、中井浩一、服部憲児、大野裕己、芹沢利弘の方々にゲスト参加をいただいた。第四に、5校の事例校のミドルリーダーが、このフォーラムの主体となって報告、研究協議、そして司会運営を行うよう企画した。

このフォーラムは4年間の総まとめとして、小規模な「参加者報告協議型」の方式を採ることによって、関係者の多くが気づきと深まりのある学習を行うことができた。各々の学校が多様な関係者の認識と活動で構成され動いている実態も鮮明になった。教育研究者・政策担当者・学校教職員それぞれが、理論・政策・実践の絡まり合いを意識しながら、明日の実践を見通そうとする営みに新たな知見を与えることができた。

(3) セミナー展開型への挑戦 第10回フォーラム

2010年度の第10回フォーラムは、ケースメソッドによるスクールリーダー育成をテーマに、スクールリーダー・セミナー（SLS）を4日間開催し、その成果をフォーラムに反映させることを試みた。スクールリーダー・セミナーを企画運営するために、第9回と同じくフォーラム企画会議を立ち上げ、毎月1回の定例会議を計8回行った。企画会議の構成メンバーは、大阪教育大学2名、大阪府教育委員会3名、大阪市教育委員会3名の計8名で、三組織の合意形成と意思決定の場として動かし、そこではセミナーの目的、プログラム作成、参加者募集・広報活動、報告書作成など、企画運営と実務作業に関わる事項が検討された。新たにケースメソッド学習に取り組みということで、最も論点になったのがプログラム作成であった。ケースメソッドの三要素であるケースリーダー、ケース教材、学習者集団をどのように構成するかである。

ケースリーダーには、経験豊富な佐野享子筑波大学大学院准教授、竹内伸一慶應義塾大学大学院特別研究講師（現特任

准教授）にお願いし、指導助言を得ながら、筆者もケース教材を開発しケースメソッド授業に取り組んだ。

このセミナーは、多忙なスクールリーダーが参加しやすい日程を考えて、月1回土曜日午後（13：30～17：30）に開催をすることを原則とした。具体的には7月24日、8月21日、10月16日、11月27日の4日間とした。最後の第4回は第10回フォーラムと兼ねることとし、全日開催とした。新しいケースメソッド学習入門への関心は高く、校長・教頭をはじめとするスクールリーダー36名が受講を申し込んだ。セミナーを通して受講者を学習集団として、ケースメソッド学習が深まろう創意工夫した。

第10回フォーラムは、このセミナー参加者を主体にプログラムを作成し、参加者はケースメソッドによる「学びを省察する」ことをテーマとした。プログラムは、午前にセミナー参加者によるグループワーク、午後に基調講演二つとセミナー参加者主体のパネルディスカッションとした。この第10回フォーラムでは、スクールリーダー研修をケースメソッド方式で実施し、そのセミナー参加者が自分たちの学びを振り返り意味づける作業

を集団的に行った点で画期的である。「セミナー展開型」フォーラムの広がりと深さを関係者が実感できたのである。

5 スクールリーダー・フォーラムの考察

次に、先上げた三つの視点から三つのフォーラムを考察すると、次のように共通点が見出せる。

a. 三者の「つながる場」の形成

- ① 教育研究者・学校教職員・政策担当者との連携
- ② 大学・学校・教育委員会の連携
- ・三者が一堂に会して研究協議する場として構築（研究指定校の「公開研究会」、行政主催の「研修会」とは異なる独自の場）
- ・三者が対等かつ率直に意見交換できる「デモクラティックな空間」
- ・「事例校」を軸に大学と教育委員会が連携する三角形の構造
- ・大阪府の三角形と大阪市の三角形を「つなげる」

b. 「創発の場」の形成

- ① 学校づくりおよびスクールリー

ダー育成の理論・政策・実践の関係づけ

- ② 理論知と実践知の交流・対話・統一

・理論・政策・実践を関連づけて総合的に検討（全体を見ながら当面の課題や問題点を解きほぐす。改善策や手法の学習だけでなく、学校課題をトータルに見つめる。）

・研究協議を通して互いに学びあい、気づき、発見する「知識創造」の場（「現場主義の創発の場」水本徳明）

・参加者各自が理論知と実践知の交流を図ることを課題とする。

・書くこと、報告すること、発信することを循環させながら「知識創造」につなげる。

c. フォーラムの理念の具体化

- ① 独自性・持続性・挑戦性
- ② 学校支援とスクールリーダー育成への貢献
- ・フォーラムという独自の場を持続的に形成
- ・「公開協議型」「セミナー展開型」「参加者報告協議型」の挑戦
- ・学校支援事業は多様な形態で幅広く行ったり、深く継続的に行ったり

する（「学校現場主義」）。

・スクールリーダー育成事業はケース
メソッドによるセミナーを実験的
に行う。

こうしたフォーラムの特徴をふまえて、第10回フォーラム（パンフレットに記載）ではその理念を次の四点にまとめている。

①スクールリーダーの「学びの場」を創る

②学校づくりを専門的立場から支援する

③学校づくりの理論・政策・実践を総合的に検討する

④実践者・政策担当者・研究者が現実に即して研究交流する

このような視点を大切にしてフォーラムが積み上げられる中で、それを主催する関係者、参加者、そして報告書の読者が学び合い育ってきたと考えている。

スクールリーダー・フォーラムは、各学校の実践を持ち寄り、研究協議する「広場」を設け、学校関係者の実践的な研究交流を促すものである。教育研究者・学校教職員・政策担当者が互いに学び合うことによって明日の実践の手がかりを得ると共に、その成果を教育研究や教育政

策に反映させたいと考えてきた。フォー

ラムの取り組みが学校関係者に支持されて、10年にわたって展開されてきた。こうした一連の取り組みを「大阪型フォーラム方式」と呼ぶことにする。これは福

井大学教職大学院の「福井型学校拠点方式」を意識してのことである。同大学院は地域の拠点校をベースに研究者と実践者が実践的協働研究に取り組み「実践し省察するコミュニティ」を構築する営みを重ねている。両者はいずれも「教師の学習コミュニティ」を形成することをめざしているが、異なる内容・形態で展開していることは興味深い。大阪の地で創発され全国的なつながりの中で発展してきた「大阪型フォーラム方式」が、各地に芽吹きネットワークが形成されることを願っている。

これまでスクールリーダー・フォーラムで講演・報告してくだつた方々は121名で、参加者は延べ978名と1,000名に達しようとしている。作成し配布した報告書10冊は、総ページ数1,262頁で10,000部を超えている。特に、フォーラム報告書は発表内容だけでなく、テーマに関して第一線の教育研究者、政策担当者、学校教職員の方々

から論稿をいただき、第一級の報告書となるよう編集してきた。良質の報告書が学校関係者に幅広く提供されており、教職員が参照し活用していることを有り難く思う。

スクールリーダー・フォーラムの企画運営、実施にあたっては、大阪府教育委員会、大阪市教育委員会、学校教職員、大学教職員、大阪教育大学事務局に所属する多くの方々から、多大なご協力とご支援をいただいた。それに支えられてフォーラムでは10年間絶えざる挑戦を重ねることができた。改めて感謝申し上げます。

（文責 大脇康弘 大阪教育大学教授）

（注）本稿はスクールリーダー・フォーラムの事務局を担った大脇が、フォーラムの取り組みの特徴と成果について考察したものである。フォーラム事務局としての公式見解だけでなく、個人的見解が含まれていることを付記する。



◆主要参考文献◆

(1) 先行研究として次のものがある。第

6回フォーラム報告書『スクールリー

ダーの学習拠点づくり』2007. 所

収の大野裕己、水本徳明、中留武昭の
論稿。中井浩一『大学「法人化」以後』

ちくま新書ラクレ、2008. 大脇康

弘、水本徳明、中井浩一「短期連載」

大学・学校・教育委員会のパートナー

シップ」『月刊高校教育』2009年

7～9月号、大脇康弘「スクールリー

ダー・プロジェクトの展開―大学と教

育委員会のパートナーシップ」、SL

P、2009.

学会発表として、大脇康弘・服部

憲児・大野裕己「スクールリーダーの

学習コミュニティを創る―スクール

リーダー・プロジェクトの挑戦」日本

教育経営学会第47回大会、玉川大学、

2007. 6. 2. 大脇康弘「大学と教

育委員会のパートナーシップ―スクー

ルリーダー・プロジェクト(SLP)

の実践を中心に」日本教育行政学会第

43回大会、東京大学、2008. 10.

11. 大脇康弘「スクールリーダー・プ

ロジェクト(SLP)の実践的研究―

スクールリーダー・フォーラム(SL

F)の実践と省察」日本教育経営学会

第51回大会、日本大学、2011. 6.

4.

(2)『教職研修』での連載。「スクールリー

ダー教育の構築―学習機会とプログラ

ム」2006年度、「スクールリーダー

教育の実践―カリキュラム開発と授

業づくり」2007年度、「スクール

リーダー養成の教職大学院」2008

～2009年度、「大学と教育委員

会のパートナーシップ」2009～

2010年度。

(3)『月刊高校教育』での連載。「学校革新

への道―普通高校の組織マネジメント

ト」2008年度、「ケースメソッド研

究事始め―新たなスクールリーダー育

成法」2011年度。

(4)「教師のための学習コミュニティ」P

SE、2007. 1. 「教師の学習コミュニ

ニティ」PSE、2008. 「スクー

ルリーダー・プロジェクトの展開」S

LP、2009. 「教師の学習コミュニ

ニティを創る」SLC、2010. 「ス

クールリーダー・フォーラムの展開」

SLF、2010. 「教師の学習コミュニ

ニティの展開」SLC、2011.

(5)スクールリーダー・フォーラムの基本

資料は、第1回～第10回の報告書、「ス

クールリーダー・フォーラムの展開」

SLF、2010. などがある。



スクールリーダー・プロジェクト (SLP) 研究報告書一覧 2002～現在

A. スクールリーダー・フォーラム報告書 (SLF)

スクールリーダー・フォーラム事務局編、大阪教育大学・大阪府教育委員会・大阪市教育委員会合同プロジェクト

(大阪府は 2009 年から参加)

- ・第 1 回『学校教育自己診断を实践する—学校を開く試み』2003.3、105p.
- ・第 2 回『学校を開く、学校を診断する—学校協議会と学校教育自己診断を連関させて』2003.11、140p.
- ・第 3 回『スクールリーダー養成の必要性と可能性—専門職大学院づくりを軸に』2004.3、160p.
- ・第 4 回『授業評価の理論・政策・実践—授業改革のために』2005.2、132p.
- ・第 5 回『リーダー層教員の力量形成—量的確保と質的向上』2005.11、100p.
- ・第 6 回『スクールリーダーの学習拠点づくり—大学と教育委員会のコラボレーション』2007.2、160p.
- ・第 7 回『学校課題への挑戦—経営革新プロジェクトの取り組み』2008.3、118p.
- ・第 8 回『学校の自己革新と支援体制—学校革新プロジェクト 2008』2009.2、96p.
- ・第 9 回『豊かな学校評価を求めて—自己評価と学校関係者評価』2009.11、108p.
- ・第 10 回『スクールリーダーの実践力育成—ケースメソッド学習入門』2011.3、130p.
- ・第 11 回『次世代スクールリーダーの育成』2011.11 予定、(100p.)
(第 1 回～第 3 回：大脇康弘・大野裕己・金子勉編、第 4 回～第 6 回：大脇康弘・大野裕己・服部憲児編、第 7 回：大脇康弘・大野裕己・服部憲児・木原俊行編、第 8 回：大脇康弘編、第 9 回：大脇康弘・木原俊行・森田英嗣・臼井智美編、第 10 回：大脇康弘・臼井智美編、第 11 回：大脇康弘・林龍平・大仲政憲・小山将史編)

B. 学校評価実証校支援プロジェクト (SRP)

大阪府教育委員会・大阪教育大学合同プロジェクト

- ・『学校評価実証校支援事業報告会資料 2004』大阪府教育委員会・大阪教育大学合同プロジェクト、2005.3.
- ・(参考) 大阪府教育委員会・学校運営改善のための学校評価システムの確立に関する調査研究協力者会議 報告書『学校教育自己診断と学校協議会』大阪府教育委員会高等学校課 HP、2005.3.
- ・『学校評価実証校支援事業報告会資料 2005』、大阪府教育委員会・大阪教育大学合同プロジェクト、2006.2.
- ・大阪教育大学編『学校教育自己診断ハンドブック～活用の手引き～』(平成 17 年度大阪府教育委員会委託事業 学校評価に関する実証的研究「学校評価実証校支援プロジェクト」) 大阪教育大学、2006.3. (大脇・大野・服部編)

C. <大学・教育委員会連携授業「大阪の学校づくり」>

大阪教育大学スクールリーダー・プロジェクト編集・発行

- ・『大阪の学校づくり 2005—夜間大学院の授業実践』2006.3、102p.
- ・『大阪の学校づくり 2006』2007.3、92p.
- ・『大阪の学校づくり 2007』2008.3、90p.
- ・『大阪の学校づくり 2008』2009.3、83p.
- ・『大阪の学校づくり 2009』2010.3、72p.
- ・『大阪の学校づくり 2010』2011.3、68p.

D. スクールリーダー・セミナー*

スクールリーダー・セミナー 2004 事務局編、大阪教育大学スクールリーダー・プロジェクト*

- ・『学校づくりの思想と技術—学校評価を軸に』2004.8、134p.
- ・『学習するスクールリーダー—学校の組織づくりを軸に』2005.3、129p.

スクールリーダーシップ講座 (大阪)『学校づくりの理念と技術』
広域大学間教員養成・研修コンソーシアム：筑波大学・大阪教育大学・千葉大学・東京学芸大学、2006 年 5 月～8 月*

スクールリーダー・セミナー 2010 大阪教育大学・大阪府教育委員会・大阪市教育委員会合同プロジェクト

- ・『スクールリーダーの実践力育成—ケースメソッド学習入門』2011.3、130p. (再掲)

スクールリーダー・セミナー 2011 大阪教育大学・大阪府教育委員会・大阪市教育委員会合同プロジェクト

E. <単行本・雑誌連載など>*

- ・『学校評価を共に創る—学校・教委・大学のコラボレーション』学事出版 (編著)、2003.
- ・連載：スクールリーダー教育の構築—学習機会とプログラム、『教職研修』教育開発研究所、2006 年度
- ・連載：スクールリーダー教育の実践—カリキュラム開発と授業づくり、『教職研修』教育開発研究所、2007 年度
- ・連載：スクールリーダー養成の教職大学院、『教職研修』教育開発研究所、2008～2009 年度
- ・連載：大学と教育委員会のパートナーシップ、『教職研修』教育開発研究所、2009～2010 年度
- ・連載：行動派校長の学校マネジメント、『月刊高校教育』学事出版、2007 年度
- ・連載：学校革新への道—普通高校の組織マネジメント、『月刊高校教育』学事出版、2008 年度
- ・連載：ケースメソッド研究事始め—新たなスクールリーダー育成法、『月刊高校教育』学事出版、2011 年度
- ・連載：校長力を高める、『悠 haruka』ぎょうせい、2006 年度
- ・連載：教育改革最前線：政策動向と実践課題、『悠+ haruka plus』ぎょうせい、2007～2008 年度
- ・教師のための学習コミュニティ—夜間大学院で学ぶ (『実践教育学論集 2006』別刷版) 2007.1、24p.
- ・教師の学習コミュニティ—進化する夜間大学院 (『大阪の学校づくり 2007』別刷版) 2008.3、20p.
- ・スクールリーダー・プロジェクトの展開—大学と教育委員会のパートナーシップ、SLP、2009.3、24p.
- ・教師の学習コミュニティを創る—夜間大学院のスクールリーダー教育、SLC、2010.3、24p.
- ・スクールリーダー・フォーラムの展開—大学・学校・教育委員会のコラボレーション、SLF、2010.10、8p.
- ・教師の学習コミュニティの展開—学習するスクールリーダー、SLC、2011.3、16p.
- ・スクールリーダー・フォーラムの挑戦—大学・学校・教育委員会のコラボレーション、SLF、2011.10、16p.

(*は関係報告書)

スクールリーダー・フォーラムの歩み 2002～2011

大阪教育大学・大阪府教育委員会・大阪市教育局委員会合同プロジェクト（大阪市教育局委員会は第9回より参画）

■第1回「学校教育自己診断を実践する—学校を開く試み」

（2003.3.1、参加者 112 名、報告書 105 頁）

◎基調講演：木岡一明（国立教育政策研究所）

◇シンポジウム：善野八千子（大阪府教育センター）、易壽也（大阪府立松原高校）、大脇康弘（大阪教育大学）

□分科会報告者 小学校部会：箕面市立西小学校（田中直樹）、堺市立土師小学校（峰坂農子）、中学校部会：豊中市立第一中学校（大友庸好）、高槻市立川西中学校（浦岸英雄）、高校部会：大阪府立鳳高校（清広志）、大阪府立吹田東高校（中村光男・浅川又一）

・総司会：米川英樹、シンポジ司会：長尾彰夫・山崎彰、分科会司会：（小）中島智子・大野裕己、（中）橋本幸一・金子勉、（高）八尾隆・大脇康弘

■第2回「学校を開く・学校を診断する

—学校協議会と学校教育自己診断を連関させて」

（2003.11.29、参加者 156 名、報告書 140 頁）

◎基調講演：成山治彦（大阪府教育委員会教育振興室長）

・対論：成山治彦・長尾彰夫（大阪教育大学副学長）

◇シンポジウム：土田邦男（大阪府立豊島高校）、赤川隆洋（箕面市教育委員会）、菊地栄治（国立教育政策研究所）

□分科会報告者 小学校部会：大野裕己・茨木市立安威小学校（島村唯起子）、河内長野市立川上小学校（平野武男・和田清孝）、中学校部会：金子勉、寝屋川市立第十中学校（中井豊）、堺市立野田中学校（福島寿啓）、高校部会：大脇康弘、大阪府立大塚高校（田中満公子）、大阪府立泉陽高校（木村俊一・戸根一詩）、盲・聾・養護学校部会：藤田裕司、大阪府立藤井寺養護学校（藤井雅乗）、大阪府立佐野養護学校（阪文文昭）

・総司会：猿田茂、シンポジ司会：米川英樹・八尾隆、分科会司会：（小）林龍平・善野八千子、（中）久田敏彦・柴田芳明、（高）瀧野揚三・堀池鏡一、（盲・聾・養）白石龍生・中島康明

■第3回「スクールリーダー養成の必要性と可能性

—専門職大学院づくりを軸に」

（2004.3.27、参加者 101 名、報告書 160 頁）大塚学校経営研究会と共催

◎基調講演：小島弘道（筑波大学教授）

◇シンポジウム：和佐真宏（大阪府教育委員会）、西稜司（上越教育大学）、中垣芳隆（大阪府立北野高校）、大脇康弘（大阪教育大学）

・総司会：猿田茂、シンポジ司会：堀内孜・米川英樹

■第4回「授業評価の理論・政策・実践—授業改革のために」

（2005.2.19、参加者 21 名、報告書 127 頁）

◎基調報告：森田英嗣（大阪教育大学助教授）、大木愛一（大阪教育大学助教授）

□分科会報告者 小学校部会：池田市立伏尾台小学校（森山康浩）、大東市立四条小学校（佐久間敦史）、中学校部会：高槻市立五領中学校（植木正巳）、茨木市立豊川中学校（田中宏和）、高校・大学部会：大阪府立松原高校（坂井啓祐）、大阪教育大学（任田康夫）→ 全体会

・総司会：滝澤公子、全体会司会：大脇康弘・津田仁、分科会司会：（小）田中博之・滝澤公子、（中）久田敏彦・明石一朗、（高・大）森田英嗣・真鍋政明

■第5回「リーダー層教員の力量形成—量的確保と質的向上」

（2005.11.26、参加者 121 名、報告書 116 頁）

◎基調講演：木原俊行（大阪市立大学大学院助教授）

◇シンポジウム：山崎博敏（広島大学）、河村繁（大阪府立豊中高校）、西川仁志（大阪府教育委員会）、服部憲児（大阪教育大学）

・総司会：中島智子、シンポジ司会：大脇康弘・尾上良宏

■第6回「スクールリーダーの学習拠点づくり

—大学と教育委員会のコラボレーション」

（2006.11.26、参加者 31 名、報告書 160 頁）

◎基調報告 A：大野裕己（大阪教育大学）、基調報告 B：中島智子（大阪府教育委員会）

□セッション報告：1 服部憲児（大阪教育大学）、2 水本徳明（筑波大学）、3 大脇康弘（大阪教育大学）、4 大竹晋吾（新潟経営大学）、5 竺沙知章（兵庫教育大学）

◇総括講演：島崎英夫（大阪府教育委員会）、中留武昭（鹿児島県立大学）

・誌上参加：曾余田浩史（広島大学）、元兼正浩（九州大学）

・総司会：服部憲児、司会：大脇康弘・大野裕己

■第7回「学校課題への挑戦—経営革新プロジェクトの取り組み」

（2008.1.30、参加者 192 名、報告書 115 頁）

◎基調報告：福永光伸（大阪府教育委員会）

◇シンポジウム：並河宏（大阪府教育委員会）、奥田喜代江（刀根山高校）、黒田浩継（久米田高校）、大野裕己（大阪教育大学）

□ポスター発表（高校を略）第1学区：池田、渋谷、東豊中、刀根山、吹田、吹田東、山田、高槻北、第2学区：市岡、香里丘、守口東、第3学区：布施、山本、清友、阪南、第4学区：金岡、東百舌鳥、高石、久米田、泉南、砂川（21 高校）

・総司会：福永光伸、シンポジ司会：木原俊行

■第8回「学校の自己革新と支援体制

—学校革新プロジェクト 2008」

（2009.2.28、参加者 27 名、報告書 96 頁）

◎基調報告：大脇康弘（大阪教育大学）

□事例校からの報告 □吹田東高校 唐澤広幸・小野満由美、水本徳明（筑波大学）、□久米田高校 黒田浩継・吉川測雄、大脇康弘（大阪教育大学）、□刀根山高校 加川眞一・梅景一雄、芹沢利弘（筑波大学大学院）、□布施高校 小林幸哉・徳幸道、大野裕己（兵庫教育大学）、□市岡高校 伊藤倫隆・奥田育秀、服部憲児（大阪大学）

◇総括講演：中井浩一（鶏鳴学園）、水本徳明（筑波大学）、福永光伸（大阪府教育委員会）

・総司会：久郷正征、セッション司会：黒田浩継・加川眞一・小林幸哉・伊藤倫隆・唐澤広幸、総括司会：大脇康弘

■第9回「豊かな学校評価を求めて

—自己評価と学校関係者評価」

（2009.11.29、参加者 135 名、報告書 108 頁）

◎基調講演：天笠茂（千葉大学）

◇シンポジウム：青木栄一（国立教育政策研究所）、森田英嗣（大阪教育大学）、小嶋信男（大阪府教育委員会）、横田隆文（大阪市教育局委員会）、天笠茂（千葉大学）

□分科会報告者 A 部会 学校の自己評価：小・中学校 高槻市立北清水小学校（溝畑東吾）、大阪市立文の里中学校（長宗進）、B 部会 学校の自己評価：高等学校 大阪府立高槻北高等学校（長井勘治）、大阪府立西高等学校（押井泰子）、C 部会 学校関係者評価 大阪市立放出小学校（平野大輔他）、岬町立岬中学校（岡田耕治）

・総司会：小嶋信男、シンポジ司会：向畦地昭雄・大脇康弘、分科会司会：A 松永尚子・森田英嗣、B 田中肇・臼井智美、C 赤石美保子・木原俊行

■第10回「スクールリーダーの実践力育成

—ケースメソッド学習入門」

（2010.11.27、参加者 82 名、報告書 130 頁）

◎基調講演：佐野享子（筑波大学）、竹内伸一（慶応義塾大学）

◇パネラー 「セミナー 2010」関係者：下川清一（大阪府立野崎高等学校）、大矢根克典（堺市立月洲中学校）、井出一志（大阪市立都島小学校）、大脇康弘（大阪教育大学）

◇グループワーク 「セミナー 2010」受講者 臼井智美（大阪教育大学）

・総司会：野口幸一、司会：寶田康彦、パネル司会：赤石美保子

◆スクールリーダー・セミナー 2010 開催 7/24, 8/21, 10/16, 11/27, 受講者 36 名、講師 佐野享子、竹内伸一、大脇康弘、臼井智美

■第11回「次世代スクールリーダーの育成」

（2011.11.19、参加者（60）名、報告書（100）頁）

◎基調講演：元兼正浩（九州大学）

◇シンポジウム：牛渡淳（仙台北百合女子大学）、宮田逸子（大阪市立花乃井中学校）、浅田明子（大阪府立刀根山支援学校）、大仲政憲（大阪教育大学）

◇ケースメソッド授業：講師 大脇康弘（大阪教育大学）、小山将史・深川八郎

ピアノとチェロの共演：田中紘二・大木愛一

・総司会：中西正明、司会：山下克弘、シンポジ司会：林龍平・田中肇

◆スクールリーダー・セミナー 2011 8/6 参加者 14 名、講師 大脇康弘（大阪教育大学）